

[論文]

どのような言葉が人を幸せにするのか

—— 自由回答のテキスト・マイニング分析を用いた

混合研究法アプローチ ——

小林 盾*・カローラ ホメリヒ†

この論文は、幸せをどのような言葉で表現すると、人びとの幸福度が変わるのかを検討する。そのために、幸福の質的データである自由回答が、量的データである主観的幸福感とどう関連するのかを分析する。先行研究では、検討されていない分野だった。そこで、ランダム・サンプリングに基づく郵送調査を実施して、データ収集した（分析対象は265人）。自由回答は「幸せとは一言でいうと何ですか」と質問し、テキスト・マイニング分析（計量テキスト分析）によって7カテゴリへと割りふった。主観的幸福感は、4段階で測定した。その結果、(1)自由回答カテゴリから、幸福として心理的安定をイメージする人が最多で半分以上おり、これに健康、家族、生活観が続いた。(2)主観的幸福感を従属変数とした回帰分析から、家族や生活観をイメージした人ほど幸福を有意に感じていたが、収入・仕事の想起は幸福感を有意に低下させた。以上から、家族や生活にまつわる言葉は、いわばアクセルとなって人びとを幸福にし、収入や仕事にまつわる言葉はその逆にブレーキとなっていた。こうした結果は、混合研究法アプローチによって、(自由回答という)多様性のある質的データを、同じ対象者の(主観的幸福感という)比較可能な量的データに有機的に結合させることで、はじめて得られた。

キーワード：幸福、テキスト・マイニング分析、混合研究法

* 成蹊大学文学部教授 jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp

† 北海道大学文学部准教授 hommerich@let.hokudai.ac.jp

1 リサーチ・クエスチョン

1.1 幸福の自由回答と主観的幸福感

幸せとは、一言でいうとどのような言葉で表現されるだろうか。それは、人びとの幸福感と、どのように関連しているのだろうか。

Creswell and Clark (2007=2010) によれば、経験的なエビデンスは、つぎのように量的データと質的データに分かれる。

定義 選択肢によって収集された情報を「量的データ」とよび、(自由回答など) 選択肢を用いずに収集された情報を「質的データ」とよぶ。

これに従うと、主観的幸福感のように、幸福の度合いについて「3点」「8点」など点数で測定した場合、それは「量的データ」となる。これにたいし、「幸福とは何だと思いますか」のように自由回答で回答を得たら、それは「質的データ」ということになる。

これまで人びとの幸福の分析はおもに、主観的幸福感のような量的データ（たとえば大竹ほか 2010）か、自由回答のような質的データ（たとえば石田 2009）のどちらかが用いられてきた。量的データでは、共通の選択肢を用いるため、(平均などによって) グループ同士を比較したり、全体像を俯瞰したりしやすい。ただし、人びとの共通点に着目するため、個人ごとの多様性が見逃されがちであった。

そもそも幸福とは、その人の日々の生活や人生が反映されているはずである。そうであるなら、幸福とはきわめて個人的なものであり、それゆえに豊かな多様性を持つだろう。質的データは、そうした多様性をすくいとれる。ただし、その代償として、比較や俯瞰がむずかしい。いわば、量的データでは個々人の「顔が見えない」が、質的データでは「顔しか見えない」といえよう。

そこで、この論文は以下のリサーチ・クエスチョンにアタックする。

リサーチ・クエスチョン 幸福をどのような言葉で表現するとき、人びとの幸福度が変わるのか。そのために、幸福の質的データである自由回答は、量的データである主観的幸福感と、どう関連するのか。

自由回答は、主観的健康感と関連するかもしれないし、しないかもしれない。もしこの問いを解明できれば、幸福の多様性を活かしながら、俯瞰することが可能と

なろう。しかし、もし未解明のままだと、人びとのあいだに幸福感の格差があっても、見逃してしまいかねない（幸福格差については小林 2016）。

この解明には、質的データと量的データが有機的に統合されなくてはならない。そのため、混合研究法アプローチを採用する必要がある。さらに、ランダム・サンプリングによってデータ収集したなら、結果を一般化することができる。

1.2 先行研究

これまで、先行研究ではリサーチ・クエスチョンがどのように検討されてきただろうか。テキスト・マイニング分析（または計量テキスト分析）は、自由回答という質的データを、共通の単語やカテゴリへと集約することで、量的データとして扱うことができる。そのため、幸福の自由回答を分析するさいに、利用されてきた。

石田（2009）は、インターネット調査を実施し、20～69歳男女1,000人を対象に、幸福感を5段階で質問したあと「なぜそのようにお答えになりましたか。ささいなことでも結構ですので、理由を自由にお書きください」と自由回答を求めた。テキスト・マイニングを行なった結果、単語では「家族」がもっとも多く、「生活」「健康」「子ども」「幸せ」「自分」「人」「経済」「仕事」が続いた（カテゴリへのコーディングは行なわれていない）。男女でおおきな違いはなく、20代で「自分」という言葉がトップとなっていた。

吉村（2015）は、大学で集合調査を実施し、大学生男女431人を対象にして、「幸せを感じるのはどんな時ですか？一つ挙げてください」と質問し、自由回答を求めた。その結果、単語は「食べる」「寝る」「美味しい」「友達」「好き」「人」「ご飯」「家族」「笑う」の順で多かった（カテゴリへのコーディングは行なわれていない）。

山田（2016）は、女子大学において集合調査を行い、女子大学生96人を対象に、「あなたにとっての幸せとは何ですか」について自由回答を求めた。その結果、名詞では「自分」が最多で、「幸せ」「人」「もの」「家族」「心」「友達」「気持ち」が続いた。これをカテゴリへとコーディングしたら、「心他」がもっとも多く、「家族他」「つながり他」「笑う他」「安心他」「友人他」「満足他」「健康他」が続いた。

これらは、幸福の多様性を、テキスト・マイニングによって集約することに成功している。ただし、どれも量的データとの関連を分析してはいない。また、どれもランダム・サンプリングを行なっていないため、結果を一般化することができない。

1.3 仮説

Layard（2005）によれば、主観的幸福感には7つの主な規定要因がある。7つとは、

「家族」「収入」「雇用」「地域と友人」「健康」「個人の自由」「人生観 (philosophy of life)」であり、家族がもっとも規定力が高く、この順番で効果が低下するとされる。ここで、以下の仮定を置こう。

仮定 1 主観的幸福感の主な規定要因は、自由回答にも反映され、言葉として想起される。

これに基づくと、以下の仮説を立てられる。

仮説 1 幸福の自由回答では、「家族」に関連した言葉でもっとも多く表現され、続いて「収入」「雇用」「地域と友人」「健康」「個人の自由」「人生観」の順で減るだろう。

では、これらの言葉は、主観的幸福感とどのように関連するだろうか。ここで、因果の方向を、ひとまず以下のように想定してみよう。

仮定 2 幸福の自由回答が、主観的幸福感を規定する。つまり、幸福をどのような言葉で表現するかで、主観的幸福感が異なる。

たとえば、ある言葉を想起した人ほど幸せになりやすく、別の言葉だと幸福感が低下すると仮定する。もちろん、逆に「幸福感のレベルによって、イメージする言葉が異なる」かもしれないが、ここでは想定しない。

そのうえで、幸福の規定要因を、収入、雇用、健康といった「物質的、身体的な条件」と、それ以外の家族、地域と友人、個人の自由、人生観といった、心理や人間関係に関する「非物質的的条件」に分けてみよう。

すると、物質的的条件は、生活を送るうえで不可欠な前提であるので、不足すれば確実に幸福感を低下させるが、多くても幸福にさせるとはかぎらないだろう。そのため、こうした条件が不足している人がこれらの言葉で幸福をイメージするならば、そうした人はそうでない人と比べて、幸福感が低いと予想できる。

一方、非物質的的条件は、「なくても困らないが、あればより生活が豊かになる」という性質のものであろう。そのため、これらに言及する人はそうでない人と比べて、幸福感が高まる可能性がある。そこで、つぎの仮定を置こう。

仮定 3 幸福の物質的条件は、不足すると幸福感を低下させるが、満たされても増加させない。これにたいし、非物質的条件は、満たされれば幸福感を増加させるが、不足しても低下させない。

これに基づき、つぎの仮説を立てて検証する。

仮説 2 幸福の自由回答で、「収入」「雇用」「健康」という物質的条件をイメージする人ほど、幸福感が低いだろう。「家族」「地域と友人」「個人の自由」「人生観」という非物質的条件をイメージする人ほど、幸福感が高いだろう。

2 方法

2.1 データ

データには、「2014年暮らしについての西東京市民調査」を用いる(2014年6~7月に成蹊大学社会調査士課程が実施、代表は小林盾)。郵送調査であり、標本は層化2段無作為抽出によってランダム・サンプリングされた(調査の詳細は小林・見田編2015)。母集団は東京都西東京市在住の22~69歳個人約12万人、計画標本は498人、そのうち有効回収数は308人、有効回収率は61.8%だった。

分析では、すべての変数に回答した265人を対象とする。内訳は、男性46.4%、平均年齢48.3歳、未婚21.5%/既婚69.1%/離死別9.4%、平均教育年数14.5年、正社員・正規公務員38.1%/派遣・契約・嘱託9.4%/パート・アルバイト・臨時雇用16.6%/自営業・自由業・家族従業員・内職10.2%/無職25.7%、平均等価所得456.0万円だった。

2.2 質問とコーディング

幸福について、以下の2つの連続する質問をした。

質問 1 全体的にいて、現在、あなたは幸せだと思いますか、それともそう思いませんか (○は1つ)

非常に幸せ 4	やや幸せ 3	あまり幸せではない 2	全く幸せではない 1
------------	-----------	----------------	---------------

質問 2 あなたにとって「幸せ」とは、一言でいうと何ですか

幸せとは…

まず質問 1 で、世界価値観調査のワーディングを参考に、主観的幸福感を 4 段階の選択肢で質問し、量的データを収集した。つぎに、質問 2 で、「幸せ」を自由回答で表現してもらうことで、質的データを収集した。

質問 2 の自由回答から、SPSS Text Analytics for Surveys を用いて単語を抽出した。そのうえで、仮定 1 に基づき、Layard (2005) による 7 大規定要因に従って、カテゴリへとコーディングした。ただし、収入と雇用は出現が少なかったため、併合した。また、いくつかのカテゴリは、含まれる単語にあわせてカテゴリ名を修正した。

2.3 分析方法

分析では、自由回答のカテゴリをダミー変数（該当=1, 非該当=0）としてから、カテゴリの頻度、属性グループごとの比率の比較を行なう。そのあと、カテゴリのダミー変数を独立変数と、主観的幸福感を従属変数とした回帰分析を行なう。そのとき、属性、教育年数、等価所得、主観的健康感（1=とても悪いから 5=とても良い、平均 3.4）で統制する。

3 分析結果

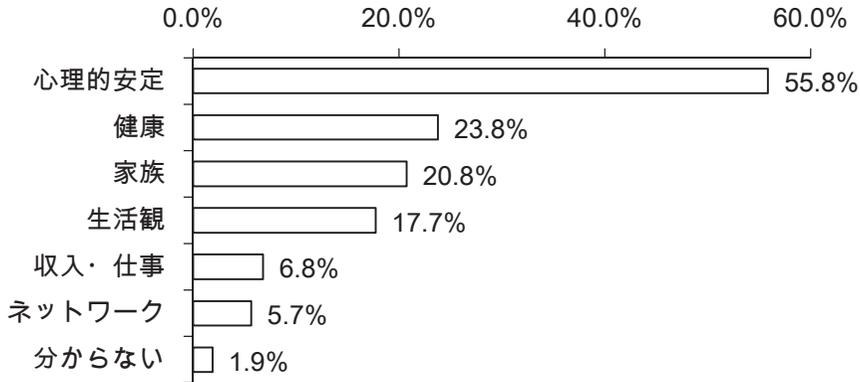
3.1 自由回答にカテゴリを割りふる

まず、自由回答から単語を抽出し、それを「家族」「収入と雇用」「地域と友人」「健康」「個人の自由」「人生観」という 6 つのカテゴリへと割りふった。なお、以下では鍵括弧（「」）内で、1 人の自由回答の全文を表す（抜粋ではない）。表記は回答のままとした。

「人とつながっている事」「相互理解」「思いやり」「家族の絆」など人間関係にかんする表現を、「地域と友人」カテゴリに入れた。そのため、より包括的に「ネットワーク」カテゴリとよぶことにする。

「安心感」「充実感」「愛情」「心の満足」「自分らしくいられる」といった個人の心理状態で、幸福を表現する人がいた。これらは「個人の自由」カテゴリに含めるのがもっとも適切だろうから、カテゴリ名を「心理的安定」へと変更した。

「日常生活」「普通の暮らしができる事」「健康で食事がおいしい事」「自由な時間」「充実した人生」といった、日常生活についての表現があったため、「人生観」



(注) $N=265$.

図1 幸福の自由回答カテゴリの出現比率

カテゴリに加えた結果、「生活観」カテゴリへと変更した。

なお、「表現できない」「?」といった回答があったので、あらたに「分からない」というカテゴリを追加した。こうして、合計7カテゴリができた。

つぎに、それぞれの自由回答が、7カテゴリのどれを含むのかを、ソフトが自動的に判断し割りふった。たとえば、「自由な時間」という自由回答には、「心理的安定」と「生活観」の2カテゴリが与えられた。このように、1つの自由回答が複数のカテゴリにまたがることもある。こうして、すべての自由回答が、すくなくとも1つのカテゴリに振り分けられた。

この段階で、カテゴリ分けが適切だったかを確認するため、各自由回答と割りふられたカテゴリの対応を、1つ1つ検討した。その結果、20人ほどの自由回答で、カテゴリの変更が必要となった。たとえば、「経済的安定」は当初「収入・仕事」と「心理的安定」の2カテゴリが割りふられたが、内容から「収入・仕事」のみへと変更した。

その結果、自由回答は平均して1.3のカテゴリに属していた。1カテゴリは195人、2カテゴリは55人、3カテゴリは14人、4カテゴリが最大であり1人いた（「家庭と仕事とプライベートの充実」）。

3.2 自由回答カテゴリの分布

では、どのカテゴリが多く使用されただろうか。図1が、カテゴリごとの出現比率を表している。ここから、心理的安定カテゴリが突出して多く、標本のうち55.8%が言及していた。たとえば、「自由であること」に加え、「心が満たされていること」

「心が穏やかでいられる時」「将来に希望があること」といった回答があった。他方で、「あまり不満なく暮らせること」「苦痛が少なく心が安らいていること」のように、悪い状態を避けることとして、捉える人もいた。

つぎに多かったのが健康カテゴリで、回答者のうち 23.8%が挙げた。たとえば、「健康で生きがいを感じて日々の生活をおくれていること」「いつも元気に笑顔でいられること」のように、本人の健康を挙げる人がいた。その一方、「家族みんなが健康で楽しく過ごせること」のように、家族の健康に言及する人もいた。

健康と同じくらい多かったのが、20.8%の家族カテゴリであった。たとえば、「家族の絆」「家族がいる、会話ができる」「家庭と仕事とプライベートの充実」などがあつた。

その後、生活観カテゴリが 17.7%いた。「健康で生きがいを感じて日々の生活をおくれていること」「衣食住そして金銭的に満足できる状態」などがあつた。「人生」という単語は、用いられなかった。

これ以降は、出現が回答者の 1 割以下となる。収入・仕事カテゴリが 6.8%（たとえば「仕事ができること」「家庭と仕事とプライベートの充実」）、ネットワーク・カテゴリが 5.7%（たとえば「誰かに必要とされていること」「誰かに必要とされていること」と続いた。分からないカテゴリがもっとも少なく、1.9%だった。これらカテゴリの出現のしやすさは、おおむね山田（2016）と一致していた。

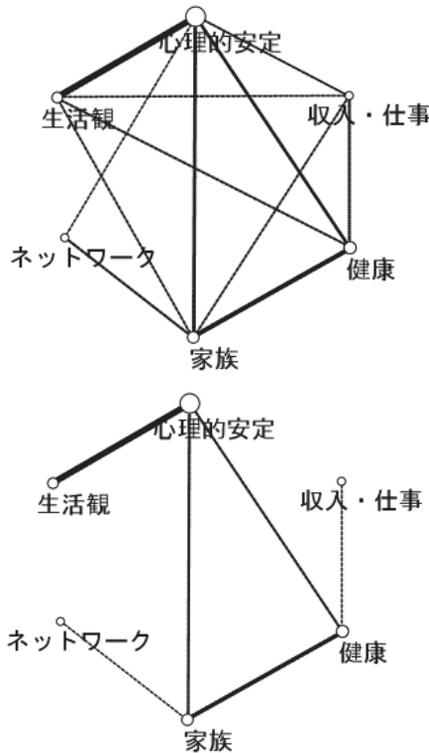
なお、質問 1 の主観的幸福感の分布は、1=全く幸せではないが 1.9%、2=あまり幸せではないが 10.9%、3=やや幸せが 60.4%、そして 4=非常に幸せが 26.8%いた。平均は 3.1、標準偏差 0.7 だった（この変数の詳細な分析は小林ほか 2015）。「やや幸せ」と「非常に幸せ」はどちらも幸福な人なので、合併して「幸福ダミー」とすると、87.2%いた。

3.3 自由回答カテゴリ間の共起関係

1 つの自由回答が、複数のカテゴリを与えられることがある。たとえば、「家族の健康」という自由回答は、家族カテゴリと健康カテゴリの 2 つに属する。

そこで、「どのカテゴリとどのカテゴリが、同時に現れやすいか」を求めてみよう。これは「共起関係」とよばれ、図 2 で表される（カテゴリ間の線が太いほど共起が多く、線がないと共起がない）。

ここから、とくに心理的安定カテゴリと生活観カテゴリ（共起 29 人）、家族カテゴリと健康カテゴリ（共起は 19 人）が、同時に記述されやすかったことが分かる。前者はたとえば、「あまり不満なく暮らせること」のように、後者は「健康で家族に



(注) $N=265$. 上はすべての共起関係, 下は6以上の共起関係のみ表示.
 ○が大きいほど出現が多く, 線が太いほど共起が多い. 「分からない」は, 他と共起関係がなかった.

図2 幸福の自由回答カテゴリ間の共起関係

心配事がないこと」のように表現されていた.

ほとんどのカテゴリは, 他のカテゴリと結びついていた. ただし, ネットワーク・カテゴリは健康, 収入・仕事, 生活観カテゴリと同時に現れなかった. 分からないカテゴリは, どのカテゴリとも共起しなかった. こうした傾向は, 6人以上の共起関係 (図2下) で, より明確に読みとれる.

3.4 グループ別の比較 (従属変数は幸福の自由回答カテゴリ, 主観的幸福感)

では, どのような人が, どのようなカテゴリで幸福を表現するのだろうか. 表1で, 幸福の自由回答カテゴリを従属変数として, グループ別に比率の比較を行なった.

ここから, 男女では差がなく, 年輩の人ほど健康カテゴリを有意に多く用いることが分かる. 婚姻状態別では, 現在結婚している人ほど, 家族カテゴリに有意に言

表 1 グループ別，幸福の自由回答カテゴリの比率

独立変数	従属変数（幸福の自由回答カテゴリ）						
	心理的安定	健康	家族	生活観	収入・仕事	ネットワーク	分からない
合計 (265)	55.8%	23.8%	20.8%	17.7%	6.8%	5.7%	1.9%
男性 (123)	53.7%	18.7%	22.0%	17.1%	4.1%	5.7%	1.6%
女性 (142)	57.7%	28.2%	19.7%	18.3%	9.2%	5.6%	2.1%
カイ二乗検定		†					
20代 (30)	66.7%	13.3%	6.7%	26.7%	3.3%	6.7%	0.0%
30代 (41)	53.7%	19.5%	24.4%	12.2%	4.9%	2.4%	0.0%
40代 (61)	59.0%	18.0%	26.2%	19.7%	8.2%	6.6%	3.3%
50代 (78)	53.8%	21.8%	25.6%	20.5%	3.8%	6.4%	3.8%
60代 (55)	50.9%	41.8%	12.7%	10.9%	12.7%	5.5%	0.0%
カイ二乗検定		**	†				
既婚 (183)	55.2%	23.5%	26.2%	16.9%	4.9%	6.0%	2.2%
離婚・死別 (25)	48.0%	24.0%	12.0%	12.0%	20.0%	8.0%	0.0%
未婚 (57)	61.4%	24.6%	7.0%	22.8%	7.0%	3.5%	1.8%
カイ二乗検定			**		*		
あまり・まったく幸せではない (34)	61.8%	17.6%	2.9%	2.9%	14.7%	8.8%	5.9%
やや・非常に幸せ (231)	55.0%	24.7%	23.4%	19.9%	5.6%	5.2%	1.3%
カイ二乗検定			**	*	*		†

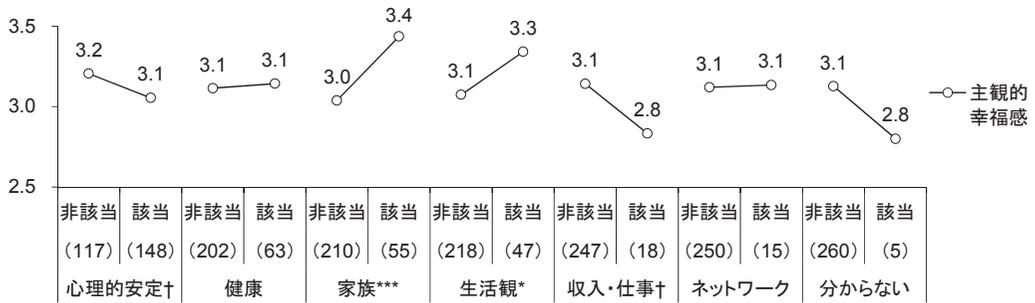
(注) $N=265$. 括弧内は人数. †は $p < .10$, * は $p < .05$, ** は $p < .01$ で有意.

及していた。これは、自然なことだろう。なお、主観的幸福感のうち「やや幸せ」と「非常に幸せ」を合わせた幸福な人は、家族や生活観を有意に挙げていた。

(表には掲載していないが) 短大卒以上ほど心理的安定が有意に多く、健康が有意に少なかった。有職者ほど、家族が有意に多かった。等価所得グループ (200 万円ごと) との有意な関連は、とくになかった。

では、どのような自由回答をした人が、主観的幸福感が高いのだろうか。図 3 で、自由回答カテゴリの有無によって標本をグループ分けしたうえで、グループ別に平均の比較を行なった (全体の平均は 3.1)。

ここから、家族や生活観で幸福を表現した人ほど、主観的幸福感が有意に高かった。家族をイメージした人は、そうでない人より 0.4、生活観では 0.2、それぞれ高かった。たとえば、以下のような自由回答があった。



(注) $N=265$. 括弧内は人数. 主観的幸福感は1=全く幸せでないから4=非常に幸せ. 分散分析で†は $p < .10$, *は $p < .05$, ***は $p < .001$ で有意.

図3 幸福の自由回答カテゴリの有無別, 平均主観的幸福感

- 「家族がいること」(50代女性, 主観的幸福感は4=非常に幸せ)
- 「家族の絆」(60代男性, 3=やや幸せ)
- 「日常生活に支障がなく平穏にらせる事」(20代男性, 3=やや幸せ)
- 「家庭と仕事とプライベートの充実」(40代女性, 4=非常に幸せ)
- 「ごほうび」(30代女性, 3=やや幸せ)

一方, 心理的安定や収入・仕事が思い浮かんだ人は, 主観的幸福感が低下する傾向があった(10%水準). それぞれ, 表現されていると幸福感が0.1, 0.3低下した. たとえば, 以下のような回答があった.

- 「安定と平和」(20代男性, 主観的幸福感は2=あまり幸せではない)
- 「欲しい」(20代女性, 1=全く幸せでない)
- 「衣食住そして金銭的に満足できる状態」(40代女性, 2=あまり幸せではない)
- 「仕事」(50代男性, 1=全く幸せでない)
- 「元気に働けて, 好きな事ができること」(40代女性, 3=やや幸せ)

健康カテゴリ, ネットワーク・カテゴリ, 分からないカテゴリは, 幸福感を増やしも減らしもしなかった.

なお, カテゴリ数(自由回答がいくつのカテゴリに属しているか)は, 主観的健康感と有意な関連を持たなかった. 1カテゴリだと平均主観的健康感が3.1, 2カテゴリだと3.3, 3カテゴリだと3.1だった(4カテゴリでは4.0だが該当者が1人).

表 2 主観的幸福感を従属変数とした回帰分析結果

統制変数	
男性ダミー	-0.072
年齢	0.013
現在結婚ダミー	0.248 ***
教育年数	0.038
有職ダミー	0.112 *
等価所得	0.044
主観的健康感	0.315 ***
独立変数	
心理的安定カテゴリ	-0.107
健康カテゴリ	-0.025
家族カテゴリ	0.161 **
生活観カテゴリ	0.144 **
収入・仕事カテゴリ	-0.119 *
ネットワーク・カテゴリ	-0.019
分からないカテゴリ	-0.071
決定係数	0.310

(注) $N=265$. 値は標準化係数. 主観的幸福感は 1=全く幸せでないから 4=非常に幸せ. 独立変数はすべてダミー変数.
*は $p<.05$, **は $p<.01$, ***は $p<.001$ で有意.

3.5 回帰分析 (従属変数は主観的幸福感)

図 3 の効果は, 属性やたがいに統制したときにも, 残るのだろうか. そこで, 主観的幸福感を従属変数とした回帰分析を実施した. 表 2 に, 結果が報告されている.

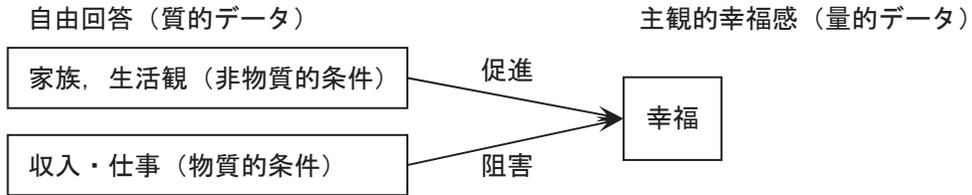
ここから, まず統制変数の効果をみると, 現在結婚している人ほど, 有職の人ほど, 健康な人ほど, 有意に幸福を感じていた. この効果は, 先行研究と一致する.

つぎに, 独立変数である幸福の自由回答カテゴリの効果をみると, 家族カテゴリと生活観カテゴリの 2 つが有意な正の効果を持った. したがって, 幸福を家族で表現したり生活観で表現したりする人ほど, 主観的幸福感が有意に高かった.

これにたいし, 収入・仕事カテゴリは, 有意な負の効果を持った. したがって, 収入・仕事をイメージする人ほど, 主観的幸福感が有意に低かった.

他のカテゴリを用いた場合, 幸福感が上がることも下がることも, なかった. これらは, 図 3 の効果とおおむね一致していることが分かる.

なお, 統制変数から教育年数, 有職ダミー, 等価所得といった階層的地位を除い



(注) 矢印は表2における有意な効果を表す。

図4 分析結果の要約

でも、結果は変わらなかった。また、すべての統制変数を除いても、同じ結果を得た。カテゴリ数は、有意な効果を持たなかった。

4 考察

4.1 分析結果の要約

(1) 幸福の自由回答を7つのカテゴリへと割りふった。その結果、自由回答は平均して1.3カテゴリに属していた。

(2) 自由回答カテゴリの分布から、心理的安定カテゴリが最多で半分以上おり、これに健康カテゴリ、家族カテゴリ、生活観カテゴリが続き2割前後いた。収入・仕事カテゴリ、ネットワーク・カテゴリ、分からないカテゴリは1割以下だった。したがって、仮説1の検証結果は以下となる。

仮説1の検証結果 おおむね支持された。家族や健康を想起する人が多かったのは、予想どおりだった。一方、(個人の自由に対応する)心理的安定が最多であったり、(収入、雇用に対応する)収入・仕事が少なかったりするなど、順位に違いもあった。

(3) 共起関係の分析から、心理的安定カテゴリと生活観カテゴリ、家族カテゴリと健康カテゴリが同時に想起されることが多かった。

(4) 主観的幸福感を従属変数とした回帰分析から、(非物質的条件である)家族や生活観をイメージした人ほど、幸福を有意に感じていた。一方、(物質的条件である)収入・仕事を想起した人は、幸福感を有意に低下させた(図4)。Easterlin (1974)は、(国単位ではあるが)経済発展の初期に幸福感がおおきく上昇するが、後期には逡減することを示した(幸福のパラドクス)。これは、ここでの結果と矛盾しない。

これらから、仮説2の検証結果は以下となる。

仮説2の検証結果 一部支持された。収入・仕事という物質的条件の想起は、主観的幸福感に負の効果を持った。家族と生活観という非物質的条件は、正の効果を持った。これらは予想どおりだった。ただし、健康という物質的条件、ネットワーク、心理的安定という非物質的条件は、有意な効果を持たなかった。

4.2 幸福感のアクセルとブレーキ

以上から、リサーチ・クエスチョンに以下のように回答できるだろう。

リサーチ・クエスチョンへの回答 幸福の自由回答で、家族や生活観をイメージした人ほど、それらが非物質的条件のため主観的幸福感が高まり、収入・仕事をイメージした人ほど、物質的条件のため下がった。したがって、家族や生活にまつわる言葉はいわばアクセルとなって人びとを幸福にし、収入や仕事にまつわる言葉はその逆にブレーキとなっていた。

こうした結果は、混合研究法アプローチによって、質的データである自由回答を、同じ対象者の主観的幸福感という量的データに有機的に結合させることで、はじめで得られた。その結果、質的データによって個人ごとの多様性を確保しつつ、量的データによって比較や俯瞰が可能となった。さらに、データはランダム・サンプリングによって収集されたので、結果を一般化することができる。

マルクスは「存在が意識を規定する」と想定した (Marx 1859=1956)。今回の分析から、物質的条件という「存在」だけでなく、家族や生活観といった非物質的条件も、主観的幸福感という意識を規定することが明らかになった。

4.3 今後の課題

(1) この論文では、東京都西東京市を対象とした。そのため、ここでの結果は西東京市全体に一般化することはできるが、日本全国で当てはまるかどうかは、検証が必要である。さらに、日本以外と比較することは、幸福のメカニズムを解明するために役だつだろう (幸福感における国際比較については Hommerich and Klien 2012)。試行的にインドネシアで、ランダム・サンプリングされた24人を対象に「幸せとは一言でいうと何ですか」と質問した (2017年8月にジャワ島西部のセラン県にて、図5)。すると、この論文では健康カテゴリが2番目に多かったが、インドネ



(注) 2017年8月にセラン県にて、左がインタビュー対象者。

図5 インドネシアにおける試行的調査

シアでイメージした人はいなかった。心理的安定が多いのは日本と共通しているが、「神の祝福」など信仰と結びつくことも多かった。これは、日本では見られなかった。

(2) この論文では、仮定2で自由回答が主観的幸福感を規定するという因果関係を、想定した。ただし、「幸せな人ほど特定の言葉をイメージする」という可能性も、否定できない。このような逆の因果関係を検証するには、インタビュー調査やパネル調査など、別の方途が必要となる（因果関係については石田 2012）。

(3) 自由回答の内容や幸福のメカニズムが、教育グループや収入グループといった階層的地位によって、異なるかもしれない（階層的地位による幸福感の違いは小林 2017）。そうだとしたら、グループごとに検討することが求められよう。

(4) この論文のメカニズムが、満足度、健康、豊かさといった他のウェル・ビーイング概念でも当てはまるかは、確認されていない。同じように、物質的条件の想起はウェル・ビーイングを低下させ、非物質的条件は上昇させるかもしれないし、そうではないかもしれない（幸福感と満足度の関係については小林・ホメリヒ 2014）。

【付記】 本研究は平成 26～30 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 S1491003 の助成を受けたものです。また、JSPS 科研費 15H01969「少子化社会におけるライフコース変動の実証的解明：混合研究法アプローチ」（基盤研究 A、代表小林盾）の助成を受けています。執筆に当たり、石田淳氏、川端健嗣氏、内藤準氏、森田厚氏、渡邊大輔氏から有益なコメントをいただきました。

[文献]

- Creswell, J. W. and V. L. P. Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks: Sage. (=2010, 大谷順子訳『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房.)
- Easterlin, R., 1974, “Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence,” in P. A. David and M. W. Reder eds., *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*, New York: Academic Press.
- 石田淳, 2009, 「人はどのような言葉で幸福を語るのか?——幸福理由のテキスト・マイニング」『関西学院大学社会学部紀要』107: 241-48.
- 石田浩, 2012, 「社会科学における因果推論の可能性」『理論と方法』27(1): 1-18.
- 小林盾, 2016, 「幸福格差社会か幸福平等社会か——社会学における幸福感研究」『TASC MONTHLY』12: 13-18.
- , 2017, 『ライフスタイルの社会学——データからみる日本社会の多様な格差』東京大学出版会.
- 小林盾, カローラ・ホメリヒ, 2014, 「生活に満足している人は幸福か——SSP-W2013-2nd 調査データの分析」『成蹊大学文学部紀要』49: 229-37.
- 小林盾, カローラ・ホメリヒ, 見田朱子, 2015, 「なぜ幸福と満足は一致しないのか——社会意識への合理的選択アプローチ」『成蹊大学文学部紀要』50: 87-99.
- 小林盾・見田朱子編, 2015, 『成蹊大学社会調査演習 2014 年度報告書——第6回暮らしについての西東京市民調査』.
- Hommerich, C. and S. Klien, 2012, “Happiness: Does Culture Matter?” *International Journal of Wellbeing* 2(4): 292-98.
- Layard, R., 2005, *Happiness: Lessons from a New Science*, London: Penguin Press.
- Marx, K. H., 1859, *Kritik der Politischen Ökonomie*. Berlin: Franz Duncker. (=1956, 武田隆夫他訳『経済学批判』岩波書店.)
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編, 2010, 『日本の幸福度——格差・労働・家族』日本評論社.
- 山田秀樹, 2016, 「大学生の幸せに関する研究——テキストマイニングによる自由記述の分析」『東海大学高等教育研究 (北海道キャンパス)』15: 1-9.
- 吉村英, 2015, 「女子大学生における幸福の概念と幸福感の規定因」『発達教育学研究』9: 13-29.

What Words Make People Happy?:

A Mixed Methods Approach by Text Mining Analyses of Open-ended Data in Japan

Jun Kobayashi/Carola Hommerich

Seikei University/Hokkaido University

jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp/hommerich@let.hokudai.ac.jp

This paper scrutinizes how open-ended answers on happiness affect subjective happiness in Japan. The literature has overlooked such effects. So, to collect data, a mail survey was conducted on a representative sample in Nishi-Tokyo city in Tokyo (sample size is 265). Respondents are asked how to express happiness in a word. These answers are categorized into seven groups by a text mining analysis. Subjective happiness is measured on a four-point scale. Following are revealed. (1) By distribution, half of respondents recall “mental stability” and related words, followed by health, family, and everyday life. (2) By regression analysis, respondents feel happier if they imagine family or everyday life. Income and employment, on the other hand, reduce happiness. Therefore, words like family and everyday life boost happiness as non-material conditions, while those like income and employment lower happiness as material conditions. These findings can be obtained only when mixed methods approaches are used so that qualitative data are organically combined with quantitative data of the same respondents.

Keywords: Happiness, text mining analyses, mixed methods